



TITLE:

# <研究ノート> 咸錫憲における「シアル思想」の萌芽：ガンディーとの関係を中心に

AUTHOR(S):

朴, 賢淑

---

CITATION:

朴, 賢淑. <研究ノート> 咸錫憲における「シアル思想」の萌芽：ガンディーとの関係を中心に. アジア・キリスト教・多元性 2004, 2: 137-148

ISSUE DATE:

2004-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/57678>

RIGHT:

## ハムソクホン 咸錫憲における「シアル思想」の萌芽 - ガンディーとの影響関係を中心に -

朴 賢淑

### 序： 問題設定と研究方法

咸錫憲（1901～89年）のシアル思想は、彼の歴史的経験と実践の中で形成されたもので、その思想は韓国の神学的潮流の一つ<sup>(1)</sup>として取り上げられているほど、韓国における典型的な土着神学の典型として評価されている<sup>(2)</sup>。シアル思想の「シ」は種子、「アル」とは実をあらわす韓国語で、転じて「民衆(people)」という意味である。これまで多くの神学書が1970年代韓国教会の流れの一つとして民衆神学を日本に紹介しつつも、咸錫憲が留学を通して内村鑑三に出会って、多くの示唆を受け帰国し、1970年以降には民衆神学の活動と深い影響関係にあったことに関しては殆ど言及されることがなかった。ところが、『民衆神学の成立と展開』の中で朴聖<sup>パクソンジョン</sup>は、「民衆神学の思想的背景として咸錫憲のシアル思想があった」ということを明確にしている<sup>(3)</sup>。神学者でもなく牧師でもない咸が教会史上重要な人物として評価されるのは、彼のシアル思想と実践が韓国の教会と社会に与えた影響力の大きさを物語るものである。

これまで咸錫憲の思想に関する研究は、主に聖書研究と民族理解、預言者的姿勢という面から取り上げられてきた傾向にある。それらの研究を踏まえ、この論文においては預言者が聖書研究を通して得た民族や世界についての理解が語られた聞き手の「民衆」に注目して行くことにする。

論述順序として、まず Ⅰ では、咸錫憲の「聖書の立場から見た朝鮮の歴史」記述に見られる歴史観の特色を考察し、続く Ⅱ で、咸錫憲の歴史記述における「苦難」の理解を三つに分けて言及していく。さらに Ⅲ では、ガンジーにおける「苦難」の理解について述べることにする。最後においては、「聖書の立場から見た朝鮮の歴史」における咸の民衆についての理解がガンジーの民衆理解とどのように関連しているのかを探ることにする。

### ハムソクホン Ⅰ． 咸錫憲の歴史観

ここで、咸錫憲の歴史観の特色について述べるに先立ち、咸の歩みを述べておきたい。

1901年生まれの咸錫憲は、官立平讓高校に入学するが、卒業する年の1919年に3・1独立運動が起き、学校教員であった叔父の影響で平讓地域の3・1運動に積極的に加わるようになる。咸錫憲は、後にこの時の体験を彼が宗教人として社会参与の意識に目覚める重要な契機となった、と振り返っている<sup>(4)</sup>。

ところが、3・1運動が終わって官立学校側が運動に参加した学生に「反省文」を提出し謝罪を要求したことで、咸はこれを拒否、1921年に独立運動の本拠地とも言われる五山学校に編入し、この学校での学びを通して生と民族と歴史に目覚めるようになる。

当時、臨時校長であった柳永模ユヨンモは漢学に詳しいキリスト者で、老荘、仏教、周易など多くの東洋古典を教えていたが、咸は柳の物事を深く考えるその姿に感化され一生彼の弟子となる。この時期の咸は、カーライルの『衣装哲学』やH.C.ウエイルズが提示した『世界文化史大系』に見られるユートピア的超国家的世界に多く影響されていた<sup>(5)</sup>。

祖国の将来を思い歴史と教育に自分の使命を感じていた咸錫憲は、1923年に日本に留学したが、大学入試勉強の間に関東大震災を経験する。彼は震災を通して、日本政府が事態解決のため朝鮮人を犯人に仕立てた事や日本の住民が政府の扇動を信じて、朝鮮人を虐待するのを見て、国家主義の問題を始めとする人間本性の問題を考えるようになる。

翌年1924年には東京師範学校（筑波大学の前身）に入学するが、入学後に彼は「自分の宗教が民族の現実に何の助けになるのか」と苦悩するようになる。当時、民族の問題を考える同期生の殆どが左翼であったが、咸は自分の宗教と道徳を捨て社会主義者になることは出来ず、考え悩んだ末、金教臣キンキョウシンの紹介で内村の集会に参加するようになる。咸錫憲に出会った1924年頃の内村鑑三は、再臨運動も終わり、関東大震災で被害を受け改築された柏木聖書講堂で聖書研究会を続けていた。この時期の咸は聖書研究会に通う一方、ガンジーやトルストイ、そしてマッチニーの著作を読んでいた、と回顧している<sup>(6)</sup>。

日本における留学後、教員の資格を得て帰国した咸錫憲は以来、母校の五山で歴史と修身を教えるようになる。1930年代当時、韓国の歴史学界は日本の植民地史観に対抗する民族主義史観と唯物史観が主流を占めていた。しかし、現実として植民地の朝鮮では自分たちの歴史を教えることが許されず、当局から日本の歴史を教えるようにと指導されていた。咸はその教育現場において朝鮮の歴史を教え、朝鮮の歴史に対する思索を続けていたのである<sup>(7)</sup>。

長い孤独な思索の末、咸は仲間6人で発刊していた雑誌『聖書朝鮮』に連載論文「聖書の立場から見た朝鮮の歴史」を1934年2月～1935年12月にかけて連載する。この連載論文「聖書の立場から見た朝鮮の歴史」は、咸錫憲の歴史観を考察する上で重要な意義を持つ画期的な論文である。

それでは、咸の歴史観における新しさとは何か。第一に、咸の新しさは1930年代において歴

史を意味づける目的と主体を「民衆」にすえ解釈し<sup>(8)</sup>、一切の階級史観、英雄史観、閉鎖的な民族史観を克服した点にある。咸錫憲は「聖書の立場から見た朝鮮の歴史」の序論と結論で、民衆が歴史の主体であることを強調する民衆史観を提示している。

第二に、咸の歴史観におけるもう一つの新しい点として「苦難史観」を挙げることができる。植民地下の咸は、自国の歴史を苦難の歴史であると解釈した。

このような咸の「苦難」についての思索とその克服が、終末論による希望に基づいている点<sup>(9)</sup>、そしてその苦難に隠された意味を模索している点に、内村鑑三の影響による聖書の視点に基づくものであるにもかかわらず、イギリスの植民地下にあったインドのガンジーやタゴールの影響が多く見受けられる。それでは、咸錫憲における「苦難」の理解はどのようなものであったのか。

## ・ 咸錫憲における「苦難」の理解

咸錫憲における内村鑑三の影響が最も顕著にあらわれているのは、聖書の終末観に基づく聖書の読み方にあったことは既述の通りである。ここに、咸錫憲における苦難の理解について三つに分けて考えることが出来る。第一に、雑誌『聖書朝鮮』の連載論文「聖書の立場から見た朝鮮の歴史」に見られる検閲による削除について言及していくことにする。第二は咸が苦難を通して主張したかったものは何かについてである。第三においては、咸の苦難理解とガンジーの苦難解釈を考察していく。

まず雑誌『聖書朝鮮』の連載論文「聖書の立場から見た朝鮮の歴史」が検閲によって削除された点について言及することにする。連載はその一回の分量がA4用紙三枚ほどの分量で、1935年の6月、10月、12月の三回に渡って部分的に削除されている<sup>(10)</sup>。雑誌『聖書朝鮮』の中で、この時期に削除された部分は「聖書の立場から見た朝鮮の歴史」の部分だけである。特に、連載の最後の部分に当たる「苦難の意味」が削除されたことで結論が途切れたものになってしまったことは、当時の痛ましい植民地状況を代弁している。削除された部分は、咸にとって歴史記述の焦点であったと同時に、検閲する側からすると非常に危険な思想であったと思われる。従って、ここでは後に復元され『苦難の韓国民衆史』に掲載されている内容に沿って、咸の思想を考察して行くことにする。

まず1935年6月号の部分で、「受難の五百年(その4)」(25)(26)の箇所が削除されている。(25)は<栗谷<sup>ユルッ</sup>のむだ骨>というタイトルで、内容的には「文祿の役(1592)」に対抗し、党派間のいがみ合いを調停、朝廷を安定させようと努力した識見者の李珥<sup>イニ</sup>(儒学者、号は栗谷)が、秀吉の再攻撃を予想し軍平十万の養成を申し入れるが、党論によって棄却されるようになった不幸な出来事について書かれている部分である。(26)は<最初の艱難>というタイトルで、主な内容は秀吉の攻め入った軍に対抗した李瞬臣<sup>イスンシン</sup>について記述されている。彼は世界最初の鉄甲船を

発明し、踏みにじられた民を助け戦う。しかし、残酷な戦争のつめあととして残ったものは数え切れない犠牲者、壊滅した産業、伝染病で各地に離散してさまよう民、百姓の姿であった。しかし、朝廷の党争はたゆまなく続き、そのため犠牲を大きく被っていた社会の下層から義兵による覚醒運動が各地で起き上がった、と述べられている。

1935年10月号は、(31) <ふたたび倒れる>というタイトルで、内容としてはプロテスタントが引き受けた歴史的課題があげられていて、第一に階級主義を打破すること、第二に事大思想を排除すること、そして宿命論の迷信をなくすことである。洪景来<sup>ホンキョソネ</sup>が起こした民衆の革命や東学革命が失敗し、疲れ果てた民族に、この時にこそ自由で正義の経験・犠牲と奉仕の新しい宗教で民衆の胸に火をつけ、根本的な改革を行わなければならないと力説している。

最後に1935年12月号には、(35) <苦難の意味>と(36) <歴史が示すわれらの使命>が掲載されていた。苦難とはガンジーが言うところの「生命の第一原理」であり、人は苦難の無い生を生きることが出来ないと主張する。しかし、その苦難はわれわれの人生をハナニム<sup>(11)</sup>へと導く。ゲッセマネで苦難のイエスが苦い杯を飲み干し十字架に向かったように、われわれもこの荷を軽く負い、十字架のみを背負って渡ろう、と励ましている。受難を生きる道こそが歴史が示すわれわれの使命であり、私たちが自分の中により偉大な力を信じ全宇宙の痛み・ハナニムの悲しみのために苦難することで、この地に天国が臨み、不義は正義によって滅亡され、各国の生存競争の上に立つ愛国心は排斥される、と展望している。

言い換えると、1935年6月と10月の部分は共にこれまでの朝鮮史における民衆の覚醒運動についての記事であり、最後の1935年12月の箇所は、現在に負っている苦難を直視し、それを克服していく道を示しているところであることを考える時、咸がこの連載を通して目指していたのは、苦難の中にいる民衆自身が置かれた現在の時代状況の直視し、覚醒することであったことがわかる。

それでは、これからはこのように削除された部分を含め、咸が苦難をどのように理解していたかについて考察してみたい。咸の「苦難」の理解は、結びの「苦難の意味」の部分において見出すことができる。自分の国が負っている「苦難の歴史」をどのように解釈し、展開していくのかについて苦悩した咸は、ガンジーの「苦難は生の原理である」という命題を真摯に受けとめ、民族の苦難を美化することなく、正面突破して新しく展開していく勇気を以下のように促している。

すなわち、「苦難は罪を清める。不義によって傷つき汚れてしまった靈魂は、苦難の苦汁で洗ってはじめて回復される。苦難は人生を深める。ひたいに深いしわがよる時、心の中には知恵が生まれ、肉を裂く傷跡によってのみ、ため息で歌う歌によってのみあらわすことができる。…苦難は人生を偉大にする。苦難に耐え得ることによって生命は一段と進化する。抑圧されることによって敵を包容する寛大が生まれ、窮乏と刑罰をこらえることによって自由と高貴を得ることができる。苦難は肉をちぎっていくが、霊をいっそう磨く。苦難が与える損害と痛みは一時だが、

その与える甲斐と意味は永遠だ。個人においても民族においても偉大な性格は苦難の賜物である。苦難は人生をハナニムの下へと導く<sup>(12)</sup>」と、苦難の深い意味について述べている。

目前の生命をつなぐのに精一杯で、人類のことを考える余裕などないと言える青年たちに、「歴史が示すわれらの使命」について力説し、人類運命共同体として進化の過程にある歴史に私たちが生きるには、使命の自覚こそが再生の原動力であると主張している。そして、そこで咸がついに見出した使命とは「世界の下水口」という理念であった。1935年11月号で、彼は韓国の歴史をインドのタゴールより示唆を受けて、道徳的に墮落した「道端に座っている乞食娘」、または「受難の女王」と悲観的に理解している。差し上げる花は皆奪われ、分別もなく王妃を見ると嘲笑され、むなしく思いこがれて新郎の王が必ず来ると待ち続け、疲れ果てた受難の女王である。

後に、咸は「受難の女王」と同じまなざしをフランスの巨匠ロダンの『娼婦であった女』（作品名：美しかりしオーミエル、1888年作）という彫刻に見出し、次のように付け加えている。

「あなたたちはフランスの名匠ロダンの「娼婦であった女」という彫刻をみたことがあるか。私はそれが韓国の姿に思えてならない。一人の老女が上半身を前にかがめ、片方の手を背中にまわし、指を曲げて苦悩をあらわし、一方の手を垂らして力なく腰掛けを握ってまたがって座っており、頭を深く垂れている。…どれほど多くの男たちに愛をささやいたことか。私はその女にむかって軽蔑のつばを吐いた。しかし、その女は私を放さなかった。彼女は社会の罪惡を代わって背負っているからだ。…アジア大陸から太平洋に通じる道端に千年の間、悲惨な姿で座る老いた娼婦の前に、この受難の女王の前に、悲しみと厳粛と尊敬をもって頭を下げなければならない<sup>(13)</sup>」。

事実、彼がこの歴史を著した時期を前後して、実際に「慰安婦」が動員された受難の歴史があり<sup>(14)</sup>、このことは咸の「聖書の立場から見た朝鮮の歴史」におけるこの記述が象徴的な隠喩表現であると同時に、当時の苦難の歴史に基づく時代的情勢を反映したものであった、とすることが出来る。

最後に、自国の姿を「道端に座っている乞食娘」や「受難の女王」という比喩表現を通して、また世界における使命を「世界の下水口」という理念に見出した咸が、「聖書の立場から見た朝鮮の歴史」という連載論文によって主張したかった重要な思想を、私たちは連載の最後の部分、すなわち検閲によって削除された1935年12月号〈歴史が示すわれらの使命〉の中に見出すことができる。それは、「愛をもって不義に勝ち、罪を赦し、苦難を負っているゆえに人類を救えることが嘘でないことを証明しなければならない<sup>(15)</sup>」という、あらゆる不義に愛という武器をもって戦う「非暴力的平和思想」に他ならない。

## ． ガンジーにおける「苦難」の理解

多くの『ガンジー伝』の中で、咸錫憲がその留学期とその後に読み、多大な影響を受けたのは、ロマン・ロランの『マハトマ・ガンジー』であった。この著作は、雑誌『ヨーロッパ』の 1923 年 3 月～5 月号に三回にわたって掲載され、12 月に単行本化されたもので、欧米・日本を問わず広く読まれ、後に、エリック・H・エリクソンのガンジー研究(『ガンディーの真理』〔1969 年〕)にも影響を与えている。ガンジー - 著作の中で、よく知られたものとしては、『ヒンド・スワラージ』(1909 年)、『自叙伝』(1927～29 年)、『南アフリカにおけるサティヤグラハ』(1928 年)、『イエラヴィダー・マンディルより』(1932 年)、『無私の行為の福音』もしくは、ガンジー訳『ギーター』(1946 年)などを挙げることができるが、他の著作は当時未だ出版されておらず、ロランが資料として用い得たのは、『ヒンド・スワラージ』のみであった<sup>(16)</sup>。それに合わせ、ガンジーが発行していた新聞『ヤング・インディア』に、1919 年から 1922 年まで発表されたガンジーの論説を多く用いている。

ロランが伝記シリーズで取り上げた人物は皆、英雄の性格を持つ。彼の言う英雄とは、観念的な思想や暴力的な力によって勝利を得た人々ではなく、どんな障害や心労をものいであれそれを克服し自己を実現して、究極的には人生を肯定した人々であった。言わば、生への確信である<sup>(17)</sup>。

ガンジーが訴訟の仕事を終えてインドへ帰国しようとした 1894 年、インド人に対する選挙権制限の問題が起こった。続いてインド人に対する人頭税の問題がもちあがり、これを契機にガンジーの南アフリカ生活が始まるのであるが、それはガンジーの言う「真理とともに歩む体験」、「苦難」を意味していたのである。

しかしながら、この間のボーア戦争(1899～1902 年)とその後のズールー族の反乱(1906 年)に負傷者看護のためにインド人野戦衛生隊を率いて従軍するという「戦場での対英協力」とも言うべき行動は、ガンジーが本気にイギリス人と平等の立場に立つチャンスを見出そうとしていたことがうかがえる<sup>(18)</sup>。

坂本徳松は、ガンジーがヨハネスバーグで弁護士を開業するかたわら、多数の貧しいインド人の生活擁護と向上のために奉仕し、自己の内部に目を向けていったことに注目している<sup>(19)</sup>。と言うのは、ガンジーは自分自身を抑制し純潔な生活に入ることなしには、他人に奉仕することも多数の人に呼びかけて行動に立ち上らせそれを指導することも出来ない、と考えていたからである。彼は聖書、イスラム教のクルアーン、インドの古典『ギーター』を読み、これを「行為の辞典」とした。特に、日常の行為や非常の時の行為を『ギーター』の精神に照らして考えるのが、ガンジーの生涯を通じての指針であった。真理把持の戦いの準備として、自己純化への精進が必要であったのである。ロランは「無害(アヒンサ)において、真理(サティヤ)において、自己抑制(プラフマチャリア)において完全に到達し、富の獲得と所有を一切放棄した者でなければ、

何人も真にシャストラを知らず」というふうガンジーが言う時、ここにおいてインド教徒の言葉は福音書と相通じるものがあると指摘している。ガンジー自身もその相関関係を意識しており、『倫理宗教論』(Ethical Religion)は「神の国と正義を求めよ。しからば他は自ら汝に与えられん」という聖句の引用を持って終わっている<sup>(20)</sup>。

ガンジーの「私は妄想家ではない。私は実践的理想主義者でありたいと思う」という自己定義は、「スワラジ(自治)が国民の目標であって、非暴力が目的ではない。インドが征服者どもの暴力の奴隷となってつながっているよりも、むしろ暴力によって自由になりたいと思う」と主張し、暴力はインドを開放し得ることが出来ないが、スワラジはインド独自の武器である魂の力、愛の武器、真理の力。サティヤグラハなしに到達し得ないと言い切っている<sup>(21)</sup>。

さらに、ガンジー自身の告白によると、彼が1893年に「受動的反抗」の啓示をうけたのは、新約聖書の「山上の垂訓」であり、トルストイの『神の国は汝の中にあり』に感銘を受けた。しかし、同時に「キリストは私の神学の一部である。キリストは神の輝かしい示現である。しかし、唯一の示現ではない。私は彼を一人だけ王座の上に見るのではない。」と言い切っている<sup>(22)</sup>。

工芸と生活の一致を説くラスキンの『この後の者に』に感激し、ラスキンの精神を具現するため農園をつくった。トルストイを読みその無抵抗主義に感動し、農園を「トルストイ農園」と名づけた。その傍ら、週間機関紙『インド評論』(インディアン-オピニオン)を創刊し、毎号それに執筆した。後に獄中でアメリカの不服従の哲学者ソローを読むなど、この多面的な読書や友人との交流の中から、ガンジーは内面生活の段階を一步一步踏みしめて行った<sup>(23)</sup>。

しかし、同時にそれらは苦しみを代価としていた。「もしあなたが実際に重要なことをやろうとするならば、あなたは単に理性を満足させるだけであってはならない。あなたはまた心臓をうごかさなくてはならない。理性の訴えは頭には良いが、心臓までとどくのは苦悩だからである。それは人間の内心を理解する道を開く<sup>(24)</sup>」と言っている。

ここに、咸錫憲に影響を与えたとされるガンジーの苦悩理解を見出すことができる。暴力は相手に苦痛を与えそれによって自分を墮落させるが、非暴力は自分に苦痛を与えることなのである<sup>(25)</sup>。これによってキリストと使徒の少数の十字架はローマ帝国を征服した、とガンジーは理解していたのである<sup>(26)</sup>。以下の文章から、自己犠牲の苦悩をガンジー自ら非暴力で行ったのは「民衆」のためであったことがわかる。

「それ(苦悩)は人類の標(しるし)である。…生命に欠くことのできない条件である。生は死から出る。麦が生えるためには種子は滅びなければならない。どんな国も苦悩の火を経ないで興ったことは決してなかった。…誰も苦しみを免れることはできない。他を苦しめることを避けつつ、苦しみを浄化することによって進歩はとげられる。苦悩(個人の)が清浄であればあるだけ進歩は大きい。『非暴力』は自覚した苦悩である。私はインドに、昔



ながらの自己犠牲の掟、苦悩の掟をあえて薦めたのであった。真の救いは暴力にあらずして非暴力にあることを疲れた世に教えたのであった。非暴力の宗教は単にリシや聖人たちのためのものではなく、一般の人々のためである。<sup>(27)</sup>」

このように、一人に真理と思われることが、他の者には誤りと見えることがあり、また暴力は決して人を信仰に導かないため、彼らの確信から発する愛の放射により、彼らの自己犠牲によって、自由に喜んで受けた彼らの苦しみによって、相手を納得させなければならない、と理解していたのである。

## ・ 「民衆」の理解における類似性

それでは、「聖書的立場から見た朝鮮の歴史」における咸の民衆についての理解がガンジーの民衆理解とどのように関連しているのかを探ることにする。

偉大な人格による宗教的なガンジーの個人的生活はインドの多くの民衆の心を捉え、社会生活や政治活動にまで進展させていったのである<sup>(28)</sup>。彼の功績は、民衆の魂の力を説きつつ、民衆の本性とそのうちにひそむ力を彼らに知らせたことである。ガンジーにとって人間的眞実とは、神の眞実に関する概念にまで深められていくものであった。

ネルーはその著『インドの発見』の中で、ガンジーを次のように批評している。

「彼のただ一筋の、しかも多面的な性格から受ける一番強い印象は、大衆との一体化であり、大衆との精神的統合であり、インドのみでなく、また世界中の無産者、貧困者、困窮者との驚くべき一致の観念であった。下積みの大衆を引き上げようとする彼の熱情の前には、他の何ものも、宗教さえも、二次的な位置しか与えられなかった。…彼の言うには『万人の目から涙という涙を拭い去ること』であった<sup>(29)</sup>」。

以上のことは、ガンジーの「永遠の眞実」がインドの下層社会の人々に信じられている宗教思想、すなわち行動を重んじ、私心のない献身奉仕を重んずるバクチの教義と深く関係している。このバクチ教義は、一般に知識を協調するヒンドゥ教の思想からは常に原始宗教やイスラム教に影響された異端の思想として取り扱われたものであった。ヒンドゥ教の正統思想が人間の差別観に立った秩序化のための思想として現実的に機能するのに対して、この思想は人間の平等観に立った差別秩序化反対の思想として理想主義的に革命的に働くのである。これは主として文芸の形で民衆に受けつがれ、時代を経るにつれ、しだいに思想としても宗教としても整っていったが、この運動にはヴァイシュナヴァ派と、シャイヴァ派の二派があり、ここで注目すべき点は、ガン

ジーがその『自叙伝』で述べているように<sup>(30)</sup>、献身と自己鍛錬を信仰の要（かなめ）とするヴァイシュナヴァ派として信心深い家系に生まれ、大きな影響を受けたことである。そのため、ガンジーは神を求めるにあたって、同胞への積極的で献身的な奉仕、こと社会の最下層の人々に対する奉仕を通じて神を求めようとしたのである。

それでは、咸錫憲のシアル思想とガンジーの民衆はどのように関わっているのか。

ガンジーの宗教心に起因する民衆への関心と奉仕は、これまでキリスト教にのみ救いを見出そうとしていた咸錫憲の民衆思想に、より広い視座を与え、他宗教にも宗教上の真理を認める宗教的寛容への糸口を与えたと言えることができる。咸は日本留学中にタゴールの『キタンザリ』を読み、汎神論も自分のキリスト教信仰に害になるのみがかえって益になる、と考えるようになった。そこからガンジーの実践性、行動主義の思想に多く共感し、ガンジーこそキリストの精神を最も真実に実践した人であるとの見解を持つに至った<sup>(31)</sup>。

帰国後、1934年～35年の連載論文『聖書的立場から見た朝鮮の歴史』において、歴史の主体を民衆に置いたことは、これと何らかの影響関係が推定される。その後1950年の6・25韓国南北戦争の時、避難先の釜山の古本屋でイギリスのEverymans社の文庫版『ギター』を見つけ読むようになってから以後は、『ギター』をハングルに翻訳するなど、韓国の宗教思想で咸ほど『ギター』に通じていた者はいないほどである。1952年-53年における咸の無教会脱会宣言は、ガンジーの書物と『ギター』精読後に断行されたことから、シアル思想の萌芽と何らかの関係性が認められる。

## 結び

ガンジーは人間の共感性に不滅の信念を持ち、最高の道徳を不断に他人への奉仕に置いた。咸錫憲がガンジーをキリストの真理を最も真実に実践した人であると理解するようになったのは、民衆への愛を貫くために行ったその「非暴力的不従順」においてであった。人間精神の同一性とその共感性をガンジーは、道徳と他一般精神に関することを扱う方法としては、「自分で模範を示さなくては、仲間については来者ではない。私が火の中に飛び込む。すると、ごくわずかの人が、同じことをする」と言っているように、理性ではなく心臓に訴えるような精神生活の実例を示す方法をとった。

アメリカのキリスト者で、太平洋戦争直前の日米交渉で活躍したスタンレ・ジョーンズが「キリスト教がインド人の生活の一部となるように普及させるには、どのような方法によったら良いか」とヒンドゥ教徒のガンジーに質問したところ、ガンジーは、「まず第一に、あなたがたキリスト教徒、宣教師、その他の人々が、もっとイエス・キリストに近い生活をすべきです」と答えたほど、ガンジーは生活の実例を通して宗教と精神を説こうとしたことがわかる<sup>(32)</sup>。

そして、咸錫憲はそのようなガンジーの言うイエス・キリストに倣う生活を全うすることに専念し、それを韓国の土壌で模索した結果、無教会を離脱した以後もシアル思想と民衆化運動を展開して行くことで神の真実に近づいて行った、とすることができる。

## 注

- (1) 金京在は、1930年代に基礎付けられた五つの神学的な流れの一つに咸錫憲の土着的生命神学をあげる。その他、朴形龍の根本主義保守神学、金在淳の進歩主義的歴史神学、鄭敬玉の自由主義的実存神学、李龍道の聖霊論的リバイバル神学が、今日に至るまで韓国プロテスタント神学運動の母体であると捉える。  
(金京在「韓国神学の胎動とその流れ」『基督教思想』、2002年2月号)
- (2) 柳東植は、咸錫憲が尹譜善らと共に韓民族が目的意識と民主主義に対する信念を失い「民族統一」の課題を忘れ無節制な経済立国の構想を行い、朴政権の退陣を要求し発表した「民主救国運動宣言」の1973年以後民衆神学を提唱し、民主化闘争に参加した「民衆体験」の持ち主である第一世代の神学者たちの組織神学者徐南同、聖書学者安柄茂、文益煥らと共に拘束されたことを記している。(柳東植『韓国のキリスト教』、東京大学出版会、1987年、164頁)
- (3) 朴聖煥『民衆神学の成立と展開』、新教出版、1997年、34頁。
- (4) 朴真浩「咸錫憲、シアル、そしてシアルドリ」『シアルドリ学会誌』、1989年。  
雑誌名の「シアルドリ」のドリは、ハングルで共同体の意である。
- (5) 金聖洙『咸錫憲評伝』、サンイン出版、41頁。
- (6) 「なぜ<シアレソリ>を出しているのか」『シアレソリ』(第15巻) 1980年4月号。
- (7) 「わたしは、5, 6年前から中学生に歴史を教えるようになったが、どうすれば若い胸に栄光の祖国の歴史を抱かせることができるかと努力してみた。しかしむだだった。・・・私は自分自身を偽ることなしには、はやりの栄光の祖国史を教えることが出来ないのを悟った。・・・それよりも、あるものと言えば圧迫であり、恥であり、分裂であり、失墜の歴史があるだけだ。公正な目で見ると時なおさらそうである。それは実に耐えられない悲しみである」(咸錫憲『苦難の韓国民衆史』、新教出版社、70頁)
- (8) 咸錫憲『苦難の韓国民衆史』、新教出版社、27頁。
- (9) 『聖書朝鮮』の1936年9月号「私の無教会」で、主幹の金教臣は、「私たち仲間が内村鑑三の無教会から得たものは「無教会主義」でなく「聖書の真理である」であったと述べているほど、内村の聖書解釈は彼らに大きな影響を与えたものと同じ知ることができる。
- (10) 最後の1935年12月は二回分の内容が削除されているので、実質的な内容では四回分であった。  
(趙光「咸錫憲の歴史哲学と韓国史理解」、咸錫憲の『苦難の韓国民衆史』著述記念70周年記念シンポジウム、2003年、2頁)

咸錫憲における「シアル思想」の萌芽  
- ガンディーとの影響関係を中心に -

- (11) ここで言うハナニムとは、もとより朝鮮古来のハナニムと同一の神ではなく、キリスト教の神を指している。しかし、古来の天人合一の思想とキリスト教の唯一神思想の融合からなる人格神としての意味を含む語としても成り立つので、日本語の「神」とは異なった意味を含んでいることから、そのままハナニムを用いることにする。
- (12) 咸錫憲『苦難の韓国民衆史』、新教出版社、361 頁。
- (13) 咸錫憲 [聖書の立場から見た朝鮮の歴史] <「生活にあらわれた苦悶の姿」、1935 年 11 月号。
- (14) 韓国挺身隊研究所編『よくわかる韓国の「慰安婦」問題』、2002 年、257 頁。
- (15) 『苦難の韓国民衆史』、378 頁。
- (16) 前川輝光『ヴェーバーとガンディー』、亜細亜大学国際関係学部国際関係研究所、東京教学社、1999 年、117 頁。
- (17) ロマン・ロラン著・蛭原徳雄・上田秋夫、宮本正清訳『ロマン・ロラン全集 14 伝記』、みすず書房、1966 年、297～298 頁。
- (18) 坂本徳松『ガンジー』、清水書院、34～35 頁。
- (19) 同上書、35 頁。
- (20) ロマン・ロラン著・宮本正清訳、『マハトマ・ガンジー』、みすず書房、18 頁。
- (21) 同上書、20 頁。
- (22) 同上書、18～19 頁。
- (23) 坂本徳松、35 頁。
- (24) 1928 年 10 月 11 日付『ヤング・インディア』紙。(中公バックス『ガンジー、ネルー』世界の名著 77、驢山芳郎、中公公論社、昭和 54 年、24 頁)。
- (25) 中公バックス『ガンジー、ネルー』、驢山芳郎、中公公論社、昭和 54 年、14 頁)。
- (26) ロマン・ロラン『マハトマ・ガンジー』、29 頁。
- (27) 1920 年 8 月 11 日。(ロマン・ロラン『マハトマ・ガンジー』、27～28 頁)。
- (28) エルベール編・蒲穆訳『ガンディー聖書』、岩波書店、103 頁。
- (29) 中公バックス『ガンジー、ネルー』、驢山芳郎、中公公論社、昭和 54 年、24 頁。
- (30) 同上書、19 頁。
- (31) 咸錫憲(注釈)『ギター』、ハングル社、1976 年、48 頁。
- (32) 中公バックス『ガンジー、ネルー』世界の名著 77、58 頁。

( ぱく・ひょんす 関西学院大学神学研究科 )

